

朝鮮半島との外交				
出版社	頁	項目名	記述	コメント
大阪書籍	25～26	中国・朝鮮との交流と渡来人	百済と新羅には生まれた伽耶(加羅、任那)地方の小さな国々は、大和王権とのつながりを利用して両国に対抗しました。朝鮮や中国の記録には、4世紀ごろから倭が朝鮮半島の国々と交渉をもったことや、5世紀には倭王が5代にわたって中国に使いを送ったことなどが見られます。 朝鮮では、新羅が力を持ち、6世紀中ごろに伽耶を、7世紀中ごろには唐と結んで百済・高句麗をほろぼしました。	加耶諸国が新羅や百済に対抗するために、大和王権とのつながりだけを頼っていたというような書き方は、実際には、新羅や百済と結ぶ国もあったことを考えると、やや妥当性を欠くと思われる。
教育出版	21	渡来した人々	この時代、日本の人々は、朝鮮南部と交流し、製鉄などのすすんだ技術をうけ入れていました。朝鮮に百済や新羅などの国ができると、大和政権は百済と同盟し、外交や戦争をつうじて、朝鮮南部とも関係を深めました。5世紀に入ると、大和政権の大王は、中国に何度もつかいを送り、中国の皇帝の権威をかりて、朝鮮北部の高句麗に対抗し、朝鮮との関係を保とうとしました。	「朝鮮南部」という言葉が曖昧で、百済や新羅などを含むのか否かが明確でなく、文意がとりにくい。また、「朝鮮北部の高句麗に対抗し、朝鮮との関係を保とうとしました」という文章も、「朝鮮」という語がなにを意味しているのか、わかりづらい表現である。
清水書院	34	ヤマト王権の支配	ヤマト王権は、朝鮮半島への進出もはかり、その正当性を認めてもらうために中国皇帝への使いを何度もおこなった。	ヤマト王権が朝鮮半島に「進出」もはかり、その正当性をもとめたというのは、朝鮮半島を支配していたかのような誤解を与えるおそれがある。
帝国書院	29	倭と朝鮮半島の関係	朝鮮半島でも、3～4世紀ごろ、小国家の分立から統一へと向かい、高句麗・新羅・百済が強大となりました。ヤマト王権は、半島南部の加羅(伽耶)地域とのつながりを強めながら、百済と連合して高句麗や新羅と戦いました。…… 5世紀になると、ヤマト王権は中国の皇帝へたびたび使いを送り、その力を借りて朝鮮半島諸国に対して優位にたとうとしました。しかし、朝鮮半島での争いに敗れることもあり、安心して鉄を手に入れることはなかなかできませんでした。	
東京書籍	26～27	中国・朝鮮との交流と渡来人	いっぽう朝鮮半島では、高句麗と、4世紀に起こった百済・新羅の三国が、たがいに勢力を争っていました。大和政権は、百済や、小国が分立していた加羅(任那)地方の国々と結んで、高句麗や新羅と戦いました。…… 大王は、倭の王としての地位と、朝鮮半島南部を軍事的に指揮する権利とを中国の皇帝から認めてもらうために、中国の南朝にたびたび使いを送りました(倭の五王)。	
	32	中国の大帝国の出現と日本	朝鮮半島では、6世紀に百済や新羅が勢力を強め、このため、大和政権は朝鮮半島南部での勢力を失いました。	これまでの文章では、加羅地方の国々と結んでいたことと、軍事指揮権を認めてもらうとしたことのみ述べられていた。それがここで「勢力」と表現されていても、何を意味するのか明確ではない。

日本書籍 新社	36	朝鮮・中国と大 和政権	4世紀の朝鮮では、高句麗が北方から進出してきて、中国がたてた楽浪郡をほろぼした。南部では、百済・新羅の2国がおこり、3国が対立するようになった。 5世紀の倭国の大王は、5代にわたって中国の宋の皇帝に使者を送った。大王は倭国王としての地位と、朝鮮半島南部を支配する、将軍としての地位を認めてもらおうとつとめていた。「武」という大王は、中国の皇帝に手紙を送り、ほぼ望んだとおりの地位を認められた。	朝鮮南部を支配する地位が認められたかのような表現には問題がある。倭の五王が要求した将軍号は支配権ではない。
日本文教 出版	17	大和朝廷の成 立	大和政権は、鉄や、大陸のすぐれた技術を求めて、朝鮮半島の南部にも勢いをのぼす。5世紀には、大王は、朝鮮半島南部を支配する地位を、中国に認めてもらおうとした。	「勢い」という表現は曖昧でなにを意味するのか明確でない。大王が中国に「支配する地位」を認めてもらおうとしたというのも正確な表現とはいえず、軍事指揮権という理解が普通ではないか。
扶桑社	32	百済を助け高 句麗と戦う	高句麗は、4世紀の初めに、朝鮮半島内にあった中国領土の楽浪郡を攻めほろぼし、4世紀後半には半島南部の百済をも攻撃した。百済は大和朝廷に助けを求めた。日本列島の人々はもともと、貴重な鉄の資源を求めて半島南部と深い交流を持っていたので、大和朝廷は海を渡って朝鮮に出兵した。このとき、大和朝廷は、半島南部の任那(加羅)という地に拠点築いたと考えられる。 大和朝廷の軍勢は、百済を助けて、高句麗とはげしく戦った。高句麗の広開土王(好太王)の碑文には、そのことが記されている。高句麗は、百済の首都漢城を攻め落としたが、百済と大和朝廷の軍勢の抵抗にあって、半島南部の征服は果たせなかった。	加耶諸国を総称して任那とよぶのは適当ではなく、現在は加耶、加羅と呼ぶのが一般的である。 大和朝廷が加耶諸国の地に「拠点」とよべるようなものをもっていたとはいえない。
	33	和の五王によ る朝貢	大和朝廷があえて南朝の朝貢国になったのは、高句麗に対抗し、朝鮮南部とのつながりを維持するためだった。	大和朝廷の中国南朝への朝貢を、朝鮮南部とのつながりを維持するためと説明するのは、意味するところが不明確。
	33	新羅の台頭と 任那の滅亡	新羅は、任那をもおびやかすようになった。562年、ついに任那は新羅にほろぼされ、大和朝廷は朝鮮半島における足がかりを失った。	大和朝廷が加耶諸国の地においていたのはせいぜい使臣団程度で、「足がかり」と表現するのは適当とは思われない。